

連なる山々、緑の森が喜びの声をあげて笑っているようだ。田や畑を結ぶ農道にも農民の話し声が響く山村に嫁いで、今年で50年になる。ささやかな農林業を営みながら、この自然を愛し、夫と一緒に、地べたからの視線を大事に忘れないように心掛けて働いてきた。

私の家では義父の代まで、米を作って生活し、子供達の進学や結婚支度は山の杉の木を売って貯金しておき、そのお金を使うという暮らしが続いてきた。義父は「二足のわらじをはくな」という考えを持っており、当時は木材価格が高かったのである。

昭和51年に、山形県の外周を回る林道が作られることになり、集落の人々を集めて説明会が開かれた。林道なので、出来るだけ田畑をつぶさない計画で、私の家の裏山を通る計画を知った集落の人々は、山の中腹に道路が出来ても、自分たちには何のメリットもない。柿崎さんの田んぼをつぶして、下に林道を作ってもらいたいと言われて、田んぼの代替として共有地をいただき、そこに開田させてもらうことになった。開田ブームも終わりに近づいた昭和53年のことである。

80坪の土地を開田して耕し始めたが、山峡の田んぼは、日照時間が短く排水が悪い。午後4時を過ぎると陽は薄れ、平年でも10坪に8俵位しか収穫出来なかった。10年ほど作り続けて、自家用の飯米にするためにササニシキの品種を植えてみた。おいしいだろうと期待して収穫したのに、ぼそぼそと粘り気のない米は舌になじまなかった。こんな米を消費者に届けるよりは、他の作物を栽培出来ないだろうかと考えていた時、思い付いたのが、タラの木を栽培

して冬期間の仕事としてタラの芽を出荷することである。

タラの芽といえば、春になると山に行き行って自生しているタラの木の萌芽を採って、天ぷらにして食し、ほろ苦い春の香りを楽しんだものだ。自然のタラの木からは頂芽1個しか収穫できない。

夫婦でとことん語り合って、まず、開田した20坪の田んぼに「改良駒みどり」という品種を植え、次の年には集落に割り当てられた減反を引き受けて、残りの60坪に「蔵王」という品種を4,200本定植した。気温の高い日が続く、何度も木陰に行き行って休憩しな

バリューサイト VALUE SIGHT

中山間地農業の 自立を求めて ～タラの芽の水耕栽培～

農業就業者数が減少するとともに、農村地域の過疎化、高齢化、耕作放棄面積の増加が進んでいる。しかし、農業地は本県の重要な地域資源であり、その有効活用が求められている。自宅の裏山を「百樹の森」と命名して、障害者などに開放するボランティア活動のかたわら、タラの芽の品種改良などで中山間地農業に独自の活路を開くバイタリティーは、農業の新たな可能性を想起させる。



タラの芽の品種別成長具合

ければならなかった。

栽培方法もわからず、農協の営農部にいってもこれといったデータや指針もなく、いくつもの試行錯誤の繰り返しだった。

栽培して2年目、落葉したタラの木を切って小屋に入れ、ハウスの床の下に電熱線を入れて20度位の温度にして、水でどろどろにしたおがくずを敷き、その床に一芽ずつ切って挿した。収穫出来るまで30日もかかる。その間カビが発生して捨てるものが出てきた。カビで出荷できないタラの芽を床から抜き取りながら「どうしてカビが出来るのだろう。1年をかけて育ててきたのに…」と私達は、カビの原因を追求してきた。

雪が消えて自然のタラの木が芽吹き始めた頃、ど

のくらいの温度で芽吹くのか測ってみると、気温が18度、土の温度が4度だった。それからヒントを得た夫は、下からの温度アップをやめて、上に電熱線を張って水耕栽培を始めた。

夫が65歳の決断として、家の側の田んぼをすべて減反して、タラの木を植えた。もっと品質が良く、短い時間で収穫できる品種を改良・開発できないものかと考え始めた夫は、農業普及所の先生からいろいろと助言や指導をいただいた。山でトゲの少ないタラの木を見つけては交配を繰り返し、ようやく新品种が誕生したのである。二転三転した揚げ句に、

付けて出願し、翌々年の平成14年9月に品種登録された。2つの品種が誕生したことは大きな喜びだった。長い間ご指導下さった農業普及所の先生方のご尽力を忘れてはならない。

完全無農薬でもカビが発生しないように、温度や水のかけ方に工夫を凝らしながら、ようやく農薬を使わないタラの芽の水耕栽培に辿り着いた。深い雪の中、ハウスで12月から4月末まで出荷できて、農機具もいない。生産費が28%と他の作物より少なく、老人や女性でも作業が出来るという利点もある。これからの魅力的な作物のひとつとして全国で栽培する人が増えている。新品种の種根を買って下さって栽培している県内の方々や県外の方に、私達が今まで勉強してきた分かった事は、包み隠さずに教えることにしている。多くの仲間が出来て、喜んでもらえることは何にもまして嬉しいことだ。

日本は今、食料の6割を外国に依存していると言われていて、日本には何でも溢れているが、ないものが夢だという人もいます。

これからは、個人が、地域が自立し、生き生きと目標に向かって自己表現できるよう、一人ひとりが努力していかなければならないと思っている。

ハウスの中で、早春の香りを漂わせて芽吹くタラの芽。たかが10センチ足らずのほだ木から、緑の芽が伸びて行くのを眺めながら「あなたと、私達は20年近くも付き合ってきたのよ」とささやいている。山村で夢を持って努力する、努力そのものが幸福だと思っている。

最上



農林家

柿崎ヤス子

孫の名前を取って、新品种を「あやの」と命名することにした。平成7年に出願したら、3年後の平成10年10月に新品种が登録された。今までの「蔵王2号」と比べると収量も多く、床に伏せ込んでから10日以上も早く収穫できた。

夫は、さらに緑が濃く、減反した田んぼに植えても病気にかかりにくい品種を求めて、夢を追いかけて始めた。何度も交配して選抜して育ててきたが、トゲなしのタラの木の品種育成の目標までは届かなかった。2回目の品種は、トゲはあるが緑が濃く、側芽も頂芽のように大きく、出荷する時に選別してみると、2Lが10%、Lが80%、Mが10%だった。収量が多く、Sが出ないために出荷する時の手数もかからない。私達はこれに「あすは」という名称を

柿崎 ヤス子 (かきざき・やすこ)

1936年山形県真室川町生まれ。結婚と同時に農林業に従事。夫の富榮さんとともに山林50%、畑80%を経営するかたわらタラの芽、マイタケなどを栽培する。1983年に農林水産大臣賞、1996年に川村造林記念山形県林業賞を受賞。

1998年、自宅の裏山を「百樹の森」と名付けて、150種以上の樹木を植え、体に障害を持つ方や児童養護施設で暮らす子どもたち、さらに地元の高校生などを招待し、森にじかに触れる癒しの場を提供する。

山形県緑を育てる女性の会代表世話人、全国林業研究女性会議理事、山形県森林審議会委員などを歴任。

著書に『森の詩～山村に生きる～』（私家版）、『百樹の森で』（創森社）、『森の贈り物』（創森社）

〒999-5521 山形県最上郡真室川町大字大沢2629
TEL・FAX 0233-63-2216